

2018 年度 研究旅行奨励制度 報告書

縄文人が残した巨大モニュメント
日本のストーンサークルを考察する

20AR168 佐藤真実

目次

はじめに

- ・研究旅行の目的
- ・期待される成果
- ・研究旅行日日程

1. 調査先の概要

- ① 伊勢堂岱遺跡
いせどうたいいせき
- ② 大湯環状列石
おおゆかんじょうれっせき
- ③ 小牧野遺跡
こまきのいせき

2. 他地域の遺跡との共通点と相違点

- ① 三内丸山遺跡
- ② ストーンヘンジ
- ③ 各遺跡の比較
 - (ア) 共通点
 - (イ) 相違点

3. 考察・まとめ

おわりに

参考文献

はじめに

研究旅行の目的

世界で一番有名なストーンサークルといえば、イギリスの「ストーンヘンジ」があげられるが、実は、日本でもストーンサークル遺跡が多く発見されている。環状列石と呼ばれるストーンサークルは、今から約4000年から3500年前頃、縄文時代に築造されたといわれている。このようなストーンサークル遺跡のことを、巨大記念物ともいう。縄文時代の巨大記念物は、これまでの発掘調査成果から墓地や祭祀場であるという見解から、日時計や天体観測施設であるという意見まで、さまざまな説が論じられてきた。そこで今回の研究旅行では、秋田県鹿角市に所在する2つの環状列石（野中堂環状列石、万座環状列石）を主体とした大湯環状列石と、北秋田市の北部、米代川西岸の河岸段丘で舌状台地上を立地とし4つの環状列石を主体とした伊勢堂岱遺跡、青森県青森市南東部に位置する、小牧野式配列（配石）と呼ばれる縦横交互の配石をもつ小牧野遺跡、これら3つの国指定史跡に着目したい。3つの遺跡は共通して、縄文時代後期に築造され、環状列石の周りを囲むように、建物跡や貯蔵穴、土壌墓が遺構として残っている。また、土偶や土器、石剣、石棒、石鏃などといった土製品・石製品が多く出土し、祭祀や儀式を行うための特別な道具から、日常生活で使用する道具が発見されている。縄文人はなぜこの地に巨大記念物を作ったのか、日本のストーンサークルについて調査し、また世界に存在している巨大記念物について、日本のものと比較、分析を行い、その共通点と違いを見つけたい。また、実際に現地へ足を運ぶことで得られる、自分が感じたことや疑問に思ったことを詳しく観察・整理し、自分なりの仮説を組み立てる一歩にすることを目的とする。

期待される成果

この研究を行うことで、期待される成果は3つあげられる。

- ① 文字化されていない人間が作ったモノ（遺物や遺跡）から、なぜこの場所にどのような目的で作ったのか、また、時期・文化の解明、根拠から、「何故」という疑問を明らかにし、縄文時代のストーンサークルを学ぶ上で基礎的な知識を身につけ整理することができる。
- ② 日本のストーンサークルを理解した上で、調査した遺跡と他地域の縄文時代の遺跡、同じ構造を持った世界のストーンサークル（イギリスのストーンヘンジなど）について研究し、これらの遺跡の共通点、相違点を比較する。
- ③ 考古学的研究において、専門的研究者が唱えている様々な学説を自分の目と足で再検証し、関連文献の調査とあわせて、なぜそのような学説が出たのか、どの説が有力であると考えられているか、その根拠を見つけ批評し、それらの遺跡の存在について自分なりの考察を行う。

研究旅行日日程

出発予定日	2018年 8月 13日	旅行日数（発着日含む） 6日間
帰着予定日	2018年 8月 18日	
	滞在地	行動・調査内容
第1日目 8月13日 (月)	福岡→仙台→秋田（秋田市）	移動日
第2日目 8月14日 (火)	秋田（北秋田市） →秋田（大館市）	伊勢堂岱遺跡 伊勢堂岱縄文館
第3日目 8月15日 (水)	秋田（大館市） →秋田（鹿角市）	大湯環状列石 大湯ストーンサークル館
第4日目 8月16日 (木)	秋田→青森（青森市）	三内丸山遺跡 青森県立郷土館
第5日目 8月17日 (金)	青森（青森市）	小牧野遺跡 縄文の学び舎小牧野館
第6日目 8月18日 (土)	青森→東京（羽田）→福岡	移動日

1. 調査先の概要

今回の研究旅行では縄文時代後期の環状列石とされる伊勢堂岱遺跡、大湯環状列石、小牧野遺跡、これら3つの国指定遺跡に着目し調査を行った。ここでは、調査先の概要についてまとめた。

① 伊勢堂岱遺跡

伊勢堂岱遺跡は秋田県北秋田市脇神字伊勢堂岱を所在とし、米代川中流域の左岸、舌状台地に構築された縄文時代後期前半（約4,000年前）の環状列石を主体とする遺跡である。広大な台地上で造成、溝状遺構といった地形改変を行い、直径30m以上の4つの環状列石（環状列石A・B・C・D）が集中して構築されていることから、縄文時代の集団祭祀を明らかにするための重要な場所である（鹿角市教育委員会 2009：58頁）。

A) 環状列石 A

直径30mの環状列石であり、東側に弧状の列石が存在していることから二重の円であったと考えられる。石の組み方が青森県青森市に所在する小牧野遺跡特有の「小牧野式配石」が一部見られる。配石下には土坑が検出されている（秋田県埋蔵文化財センター編 1999：28頁）。

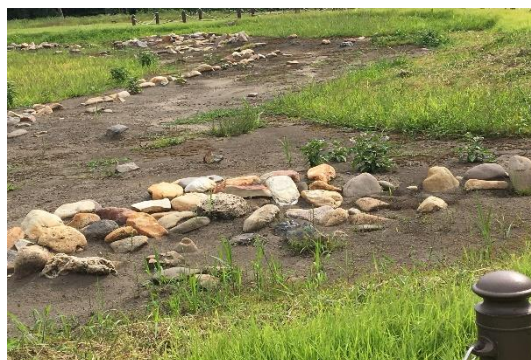


図1 環状列石 A （本人撮影）

B) 環状列石 B

弧状で長さ15m、元は円状になっていたと考えられる。環状列石の内部に土坑、外側に掘立柱建物跡が一回りしている（秋田県埋蔵文化センター編 1999：29頁）。



図2 環状列石 B （本人撮影）

C) 環状列石 C

伊勢堂岱遺跡の中で直径 45m という最も大きな規模をもつ。三重の円になっており、その円の外側には掘立柱建物が配置されている（鹿角市教育委員会編 2009：58 頁）。



図 3 環状列石 C （本人撮影）

D) 環状列石 D

直径約 33m、二重の円になっている。環状列石内部に配石遺構、その円に接して掘立柱建物跡が発見される（鹿角市教育委員会編 2009：58 頁）。



図 4 環状列石 D （本人撮影）

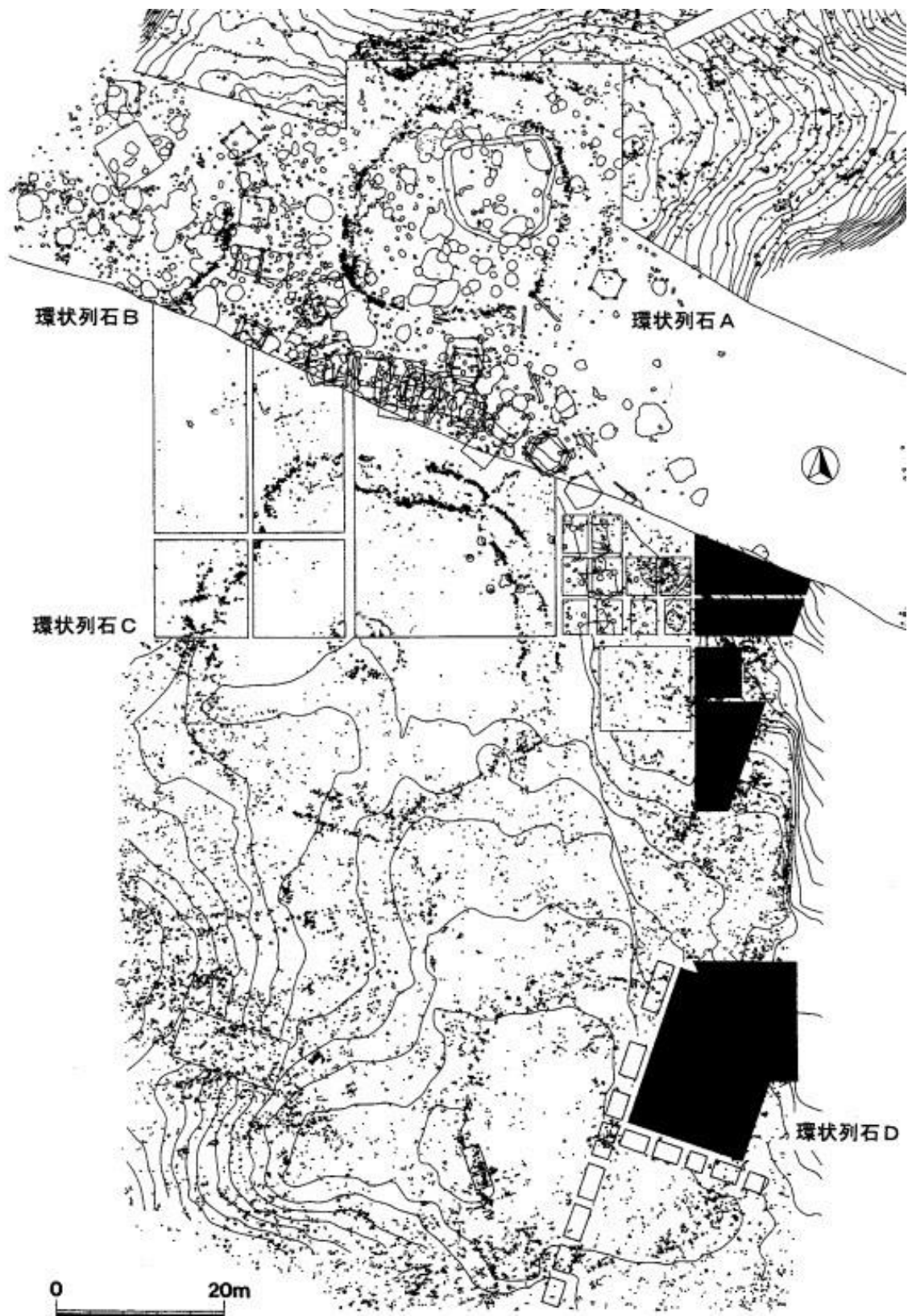


図 5 伊勢堂岱遺跡 全体図 (鹿角市教育委員会編 2009)

環状列石には米代川やその支流から川原石が運ばれ、安山岩・ひん岩・流紋岩・凝灰岩など 20 種類を超える石が使われている。さらに、環状列石の下部には死者を埋葬した土壇墓があり、その周辺から祭祀の道具が多く出土し、ここでは墓に葬られた祖先をとむらうためのマツリ^{まつり}の場として使用されたとされる。4つの環状列石をはじめ、配石遺構や掘立柱建物跡、溝状遺構、道路状遺構、落とし穴が発見されている（秋田県埋蔵文化センター編 1999：30-34 頁）。

また発見された遺物について、土器は縄文時代後期の十腰内 I 式直前型式^{とこしな}～十腰内 I 式の土器が主体となっており、その他キノコ型土製品、ミニチュア土器、耳飾り、動物形土製品、三角形石製品、三角形岩板、三脚岩板、石刀、石棒、石皿、打製石斧、板状土偶^{せきぶ}などが出土している（秋田県埋蔵文化センター編 1999：35-39 頁）。



図 6 伊勢堂岱遺跡出土遺物（本人撮影）

現地を踏査した所見として、環状列石の近くには湯車川と呼ばれる川が流れており、おそらくこの川からも川原石が運ばれたと考えられる。川から環状列石までの山道はやや急であり、石を 1 人で運ぶには難しい。環状列石周辺は平坦地となっており、一つ一つの円の規模も大きい。日時計状組石のようなはっきりした石の組み方は今回確認できなかったが、周囲の景色が見え、ひらけている場所もあることから、太陽の動きなどを確認するにはちょうど良い場所であると考えられる。

② 大湯環状列石

大湯環状列石は秋田県鹿角市十和田大湯字万座を所在とし、米代川支流の大湯川左岸、中通台地と呼ばれる舌状台地上に構築された縄文時代後期前半（約4,000年前）の大規模な環状列石を主体とする遺跡である。大湯環状列石には、万座環状列石と野中堂環状列石の2つの環状列石がある（鹿角市教育委員会編 2009：51頁）。この2つの列石はほぼ同一の構造である。環状列石の規模は、万座環状列石では直径44m、野中堂環状列石では直径52mである。配石遺構が二重の円状に配置されており、万座環状列石は105基、野中堂環状列石は55基の配石遺構が残っている（鹿角市教育委員会編 2009：51頁）。それぞれの列石の中心から見て北東には「日時計状組石」が配置されている。環状列石の周辺には竪穴建物跡、掘立柱建物跡、フラスコ状土坑、貯蔵穴などが分布している（鹿角市教育委員会編 2009：51頁）。この2つの列石の配置は、夏至と冬至の太陽の動きと関係があるとされている。この地で使用されている石は石英閃緑玢岩が中心であり、万座環状列石では約5,200個、野中堂環状列石では約2,000個とされている。石英閃緑玢岩は遺跡から2～4km離れた大湯川から運ばれている（鹿角市教育委員会編 2009：53頁）。



図7 万座環状列石 全体写真（本人撮影）



図8 野中堂環状列石 全体写真（本人撮影）

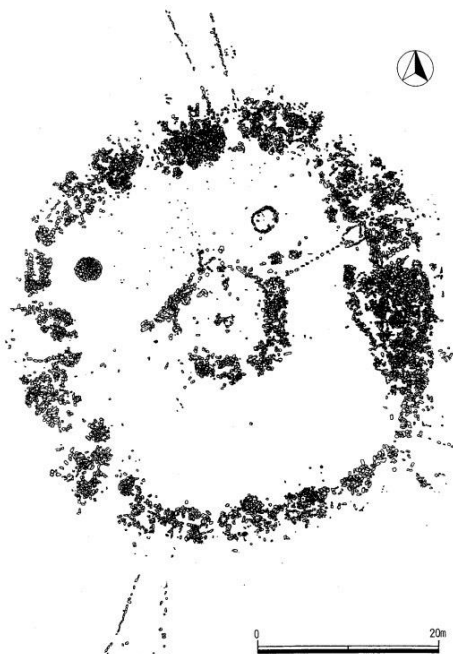


図 9 万座環状列石 全体図
(鹿角市教育委員会編 2009)

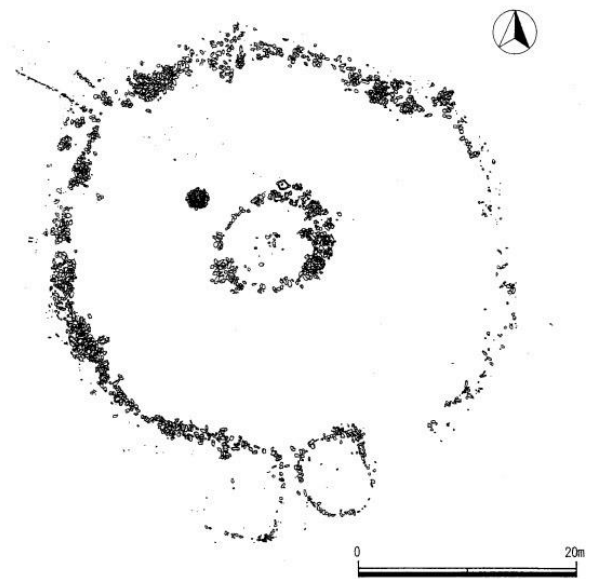


図 10 野中堂環状列石 全体図
(鹿角市教育委員会編 2009)

出土した遺物として、土器は縄文時代後期前葉の十腰内Ⅰ式を中心に、後期中葉の十腰内Ⅱ式、Ⅲ式などが発見され、深鉢・鉢・壺・片口土器・注口土器・切断土器があげられる（鹿角市教育委員会編 2009：54 頁）。

また、土製品（土偶・キノコ形・足形付土版など）、石製品（岩偶・石刀など）、日常的でないものが数多く、どれも祭祀を目的としている道具が発見されている。配石遺構については「配石墓」、環状列石は「集団墓」、それに隣接する建物跡は「祭祀施設」と考えられている（鹿角市教育委員会編 2009：54 頁）。



図 11 十腰内式土器 （本人撮影）



図 12 大湯環状列石出土遺物 (本人撮影)

現地を踏査した所見として、伊勢堂岱遺跡のように環状列石が密集しているのではなく、2つの環状列石は広い間隔をあけて配置されていた。1つの石を小さな石で囲んで配置された日時計状組石は2つの環状列石で確認できた。環状列石に使われている石英閃緑玢岩に実際触れてみたが、両手で持ち上げてもかなりの重さで全体的にずっしりとしていた。一人で長い距離、長時間運ぶのは難しく、なんらかの運搬道具を用いていた可能性も考えられる。

③ こまきのいせき 小牧野遺跡

小牧野遺跡は青森県大字野沢字小牧野を所在とし、青森平野に向かって流れる荒川と入内川に挟まれた舌状台地上に立地する、縄文時代後期前半(約4,000年前)に特異な配石と土地造成で構築された大規模な環状列石である。環状列石は、中央帯・内帯・外帯の三重の輪で構成され、その規模は、中央帯が直径2.6m、内帯29m、外帯35mである(青森市教育委員会編 1996:29頁)。外帯と内帯には楕円形の川原石を縦横に繰り返し石垣を築くように並べられた「小牧野式配列」と呼ばれる配置が発見された。環状列石の石の数は約2,900個で、石の種類は安山岩と石英安山岩が使われている。石は、遺跡の東側を流れる荒川の一帯から運ばれたとされている。その他、一部四重となる弧状の列石、外帯を囲むように配置された環状配石などもみられる。これらを構築する前に規模な土地造成が行われている。また、環状列石とともに配石遺構、湧水遺構、竪穴建物跡、貯蔵穴、土坑、捨て場などが発見されている(鹿角市教育委員会編 2009:61頁)。



図 13 小牧野遺跡 全体写真
(本人撮影)



図 14 小牧野遺跡 小牧野式配列
(本人撮影)

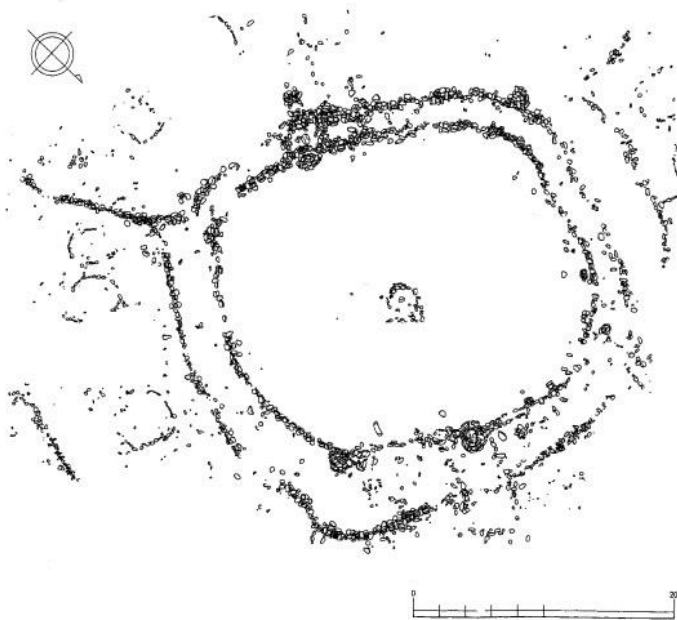


図 15 小牧野遺跡 全体図 (鹿角市教育委員会編 2009)

出土した遺物について、土器では十腰内Ⅰ式が主体を占めている。土偶や鐙形土製品、有孔石製品、三角形・円形岩版などが見つかっており、特に三角形・円形岩版の出土量は他の遺跡を圧倒しており、小牧野遺跡の代表的な遺物である。日常的に使用された道具や祭祀的な道具は、環状列石に隣接する場所を中心に出土が確認されている(鹿角市教育委員会編 2009: 61 頁)。

2. 他の地域の遺跡との共通点と相違点

ここでは他地域の遺跡と3つの環状列石（伊勢堂岱遺跡・大湯環状列石・小牧野遺跡）から共通点と相違点について確かめたい。他地域の遺跡の例として縄文時代の遺跡である三内丸山遺跡とイギリスのストーンヘンジを挙げ、それぞれを比較する。

① 三内丸山遺跡

三内丸山遺跡は青森県青森市三内を所在とし、その地形は八甲田火砕流堆積物で構成された丘陵地と緩やかな台地上に立地しており、北には沖館川、東には西滝川（入内川）が流れている（青森市教育委員会編 2005：5頁）。縄文時代前期から中期（約5,000年前～4,000年前）にかけて長い期間続いた大規模集落である。遺跡は42haと広く、計画的に配置された掘立柱建物跡、^{はっこうだかさいりゆう} 竪穴住居跡、土坑墓、配石遺構、埋設土器、盛り土、貯蔵穴、道路跡等が確認されている（青森市教育委員会編 2005：5頁）。



図18 大型掘立柱建物（本人撮影）



図19 大型竪穴住居（本人撮影）

確認された竪穴住居跡や掘立柱建物跡は縄文時代前期から中期のものであり、竪穴住居跡は約500棟見つかっている。竪穴住居の形態（柱の並びなど）は時期によって変化する。一般的に直径3～4mであるが、三内丸山遺跡では、大型竪穴住居が見られその規模は長軸32mにも達する。掘立柱建物跡も見られるが、遺跡の北西端には一部大型掘立柱建物跡が見られる。構造としてクリの木を用いた6本柱の長方形の建物で、柱穴は直径・深さが約2m、穴の間隔は4.2mと、平面長楕円形の大型

竪穴住居と同様に規模が大きいことが確認できる。用途として、神殿、物見櫓などの説が唱えられている。

また、この遺跡の埋葬方法は土坑墓が中心であり集落の東に約 420m、南西に約 310m、西端に約 40m にわたって列をなし、道路に沿って並べて配置されている。集落の南西部には約 210m にわたって墓穴の周囲に石を円状に並べた直径約 4m の環状配石墓が発見されている。北東部では子供の墓（埋設土器）が見つかっており、土器の底に穴をあけて棺に用いられていた跡が残っている（岡田 2000：197-205 頁）。

出土遺物として、土器の大半が円筒土器^{えんとうどき}である。円筒土器は縄文時代前期の円筒下層の a、b、c、d1、d2、中期上層の a、b、c、d、e の 10 型式に分類されており、三内丸山遺跡ではこれらが出土する（岡田 2000：132 頁）。土器の量は膨大であり、盛り土等から焼成に失敗した土器も多数発見されている。土器の他にも、磨製石斧、石鏃、石皿、^{たたきいし} 敲石、石棒、石剣などの石製品から土偶やミニチュア土器などの土製品、ヒスイなどが出土している（岡田 2000：128 頁）。



図 20 円筒土器（本人撮影）

② ストーンヘンジ (stonehenge)

ストーンヘンジは、イギリスのウィルトシャー州エームズベリー^{エムズベリー}の町から西に約3 km、平坦な台地であるソールズベリー平原に立地している。時代として、約4,000年から5,000年前の遺跡であると推定され、日本の時代区分に例えると縄文時代前期あたりに築造されたといえる。ストーンヘンジの構造は年代ごとに異なっており、大まかに分けると三段階に分けられる。第1段階は直径100mの土手と堀が造られ、内側の円周沿いに56個の柱穴が設けられる。第2段階では内部から木の柱の跡が多く発見され、木の柱を中心としたモニュメントであったことが読み取れる。第3段階の初期では巨石が用いられ、ブルーストーンと呼ばれる高さ2mの石柱を二重の馬蹄形状に配置している。その後、サーセン石と呼ばれる、重さ約25トンもの巨大な砂岩を石柱として30本を円形状に等間隔で配置し、石柱の上に水平になるよう横石が設置されている。内部は三石塔と呼ばれる2本の石柱の上に横石を乗せたものが5組、馬蹄形状に配置されている。外部の石柱と比べて内部は大きめの石を使用している。ストーンヘンジの石の配置には、太陽や月の動きと夏至や冬至の日の出や日没に関係しており、研究によると夏至の日と太陽の位置が一致しているとされ、かつてこの地は神殿であったと考えられている（八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館編 2012：79頁）。

また、ストーンヘンジの周辺には塚（墳墓）やカーサスと呼ばれる堤防をめぐるせた帯状の土塁や土手道、多くの柱穴、木柱を環状に配置させたウッドヘンジが発見されている。塚は墳墓の役割をはたしており、様々な種類が存在している。円盤型や鉢形、ベル型と呼ばれる円墳状のものから横に長く帯状の長塚が確認されている（ロビン 2009：9頁）。ウッドヘンジは、多重環状の木柱跡が残っており、用途については建物の柱跡や宗教施設^{こんぼう}の跡である等、様々な説が唱えられている。

出土した遺物として青銅の斧、棍棒（石製品）、鏃、土器類、骨の装飾品等が発見されている（ロビン 2009：11頁）。



図 21 ストーンヘンジの模型（本人撮影）

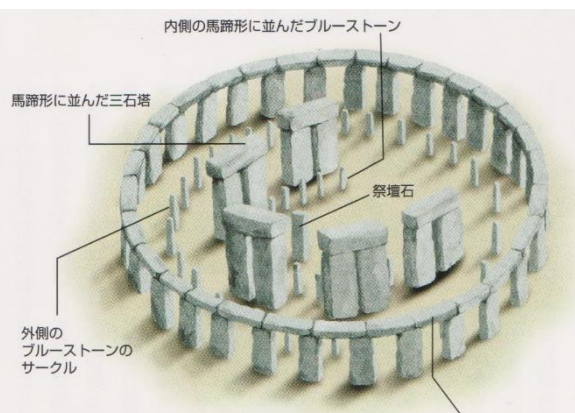


図 22 ストーンヘンジの構造（山田 2006）

③ 各遺跡の比較

各遺跡の時代年表と関連遺跡について以下の表に整理した。

年代	時代		遺跡
約 9,000 年前 約 6,000 年前	縄文時代	草創期	
		早期	
約 5,000 年前		前期	三内丸山遺跡 (ストーンヘンジ)
約 4,000 年前		中期	
約 3,000 年前		後期	伊勢堂岱遺跡 大湯環状列石 小牧野遺跡
		晩期	

表 1 各遺跡の時代年表

遺跡名	立地	遺構	出土遺物
伊勢堂岱遺跡	・米代川 ^{よねしろ} 中流域の左岸、舌状台地上に立地	<ul style="list-style-type: none"> ・環状列石 ・配石遺構 ・掘立柱建物跡 ・溝状遺構 ・道路状遺構 ・落とし穴など 	<ul style="list-style-type: none"> ・土器（十腰内式） ・キノコ型土製品 ・ミニチュア土器 ・耳飾り ・動物形土製品 ・三角形石製品 ・三角形岩板 ・三脚岩板 ・石刀・石棒 ・石皿 ・打製石斧 ・板状土偶など
大湯環状列石	・米代川支流の大湯川左岸、中通台地と呼ばれる	<ul style="list-style-type: none"> ・環状列石 ・配石遺構 ・竪穴建物跡 	<ul style="list-style-type: none"> ・土器（十腰内式中心） ・土偶

	舌状台地上に立地	<ul style="list-style-type: none"> 掘立柱建物跡 フラスコ状土坑 貯蔵穴など 	<ul style="list-style-type: none"> キノコ形土製品 動物型土製品 足形付土版 ミニチュア土器 岩偶 三角形岩板 石刀など
小牧野遺跡	<ul style="list-style-type: none"> 青森平野に向かって流れる荒川と入内川に挟まれた舌状台地上に立地 	<ul style="list-style-type: none"> 環状列石 配石遺構 湧水遺構 竪穴建物跡 貯蔵穴 土坑 捨て場など 	<ul style="list-style-type: none"> 土器（十腰内式） 土偶 鐸形土製品 有孔石製品 三角形、円形岩版など
三内丸山遺跡	<ul style="list-style-type: none"> 八甲田火砕流堆積物で構成された丘陵地と緩やかな台地上に立地 北には沖館川、東には西滝川（入内川）が流れている 	<ul style="list-style-type: none"> 掘立柱建物跡 竪穴住居跡 土壙墓 配石遺構 埋設土器 盛り土 貯蔵穴 道路跡など 	<ul style="list-style-type: none"> 土器（円筒下層・上層式土器） 磨製石斧 石鏃 石皿 敲石 石棒 石剣 土偶 ミニチュア土器 ヒスイなど
ストーンヘンジ	<ul style="list-style-type: none"> 平坦の台地であるソールズベリー平原に立地 	<ul style="list-style-type: none"> 環状列石 塚（墳墓） カーサス 土手道 多くの柱穴 ウッドヘンジなど 	<ul style="list-style-type: none"> 青銅の斧 棍棒（石製品） 鏃 土器類 骨の装飾品など

表 2 各遺跡状況

(ア) 共通点

共通点として立地条件があげられる。各遺跡は平地よりも少し高くなった台地に築造される傾向があると考えられる。縄文時代の遺跡は共通して舌状台地上に形成された例が多い。また三内丸山遺跡とストーンヘンジの周辺に配置されたウッドヘンジを比較すると、共通する部分がみられる。三内丸山遺跡には、大型の掘立柱建物跡が存在する。用途として神殿の役割をはたしていた（岡田 2000：45 頁）とされるが、おそらく当時の人はこの建物に対し巨木信仰があったのではと考えられる。方形の木柱列とする仮説もある三内丸山遺跡は環状列石ではなく、ウッドヘンジのような木の建物を神聖な場にする傾向があったのではないかと考えられる。

(イ) 相違点

相違点として、年代や国内と国外との遺構、遺物に違いが見えてきた。まず、年表から読み解くと5つの遺跡は出現した時期に差がある。巨大モニュメント的な遺跡の出現は縄文時代後期以前に三内丸山遺跡でも見られる。また日本の環状列石よりもイギリスのストーンヘンジの出現は早い。遺構について国内の4つの遺跡の遺構はほぼ同一とっていいだろう。しかし、ストーンヘンジは他とは異なっており、墓制や各施設のあり方に違いがみられる。また環状列石だけでなく、周辺の広い範囲にウッドヘンジなどの複数の神聖な場が設けられていたと考えられるが、それぞれの構築順序などまだわからない部分も大きい。遺物に関して、国内のものは時代にやや差異があることで、土器の型式が異なっているが、土製品や石製品などの種類はほぼ同じである。対してストーンヘンジの遺物は日本の遺跡から出土した遺物とは異なっている。

3. 考察・まとめ

これまで3つの環状列石を中心に取り上げてきた。これらの考察とまとめとして、遺跡の共通点と相違点をもとに、これら環状列石の存在とその目的について考えてい

まず、環状列石のあり方として築造される場所と時期、構造に特定の条件があると今回調査した3つの環状列石からも読み取ることができる。1つ目は立地である。3つの環状列石は舌状台地上に築造される傾向がある。また台地上は平坦で、太陽の動きを確認しやすい場所に環状列石は造られている。大湯環状列石をみると、万座と野中堂の2つの環状列石の内部にある日時計状組石を線で結ぶと夏至の日没方向を向いている。これは小牧野遺跡も同様である。縄文人は狩猟・漁撈・採集を生業とし、四季の変化に合わせて生活を行っており、夏至・秋分・冬至・春分といった「二至二分」が組み込まれており、環状列石はそれらが確認できる土地、特に山や谷間などが望める場所を選び、自然を切り開いて造られたといえる（八戸市埋蔵文化財センター是川館編 2012：3頁）。つまり、彼らは景観を重視していたと考えられる。加えて、環状列石を造る上で重要となるのは石の調達である。3つの遺跡の近くには河川が流れている。環状列石で使われる石は、主に山や川の自然石が使われる（阿部 1983：32頁）。伊勢堂岱遺跡は米代川やその支流、大湯環状列石は大湯川、小牧野遺跡は荒川一帯から石を運び構築している。これらの近隣河川の存在も環状列石を造る場所として適した条件になっていたと考えられる。

2つ目は造られた時期である。3つの環状列石は共通して縄文時代後期に築造されている。詳細な時期に関しては土器の形や文様により特定することができ、3つの遺跡から北東北地方特有の土器である十腰内式土器（主に十腰内Ⅰ式）を中心にしたどの遺跡にも共通して出土している。縄文後期の十腰内式は、Ⅰa式、Ⅰb式、Ⅱ式に分かれ、器形や文様構成に違いが現れる（成田 1983：129-130頁）。深鉢や壺、注口土器など様々な形式で作られ、文様に関しては波状組入文や渦巻文様など幾何学的な意匠が描かれていることが特徴である（八戸市埋蔵文化財センター是川館 2012：5頁）。

3つ目は環状列石の構造である。3つの環状列石は、二重や三重の輪で構成されている。環状列石は、それぞれが違う形で造られた配石の集合体であり、複雑な構造を持っている（八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館編 2012：2頁）。それは地域によって特有の配置方法があり、小牧野遺跡の「小牧野式配石」がその一つといえるだろう。また、この配石方法は伊勢堂岱遺跡の環状列石Aでも一部共通する。しかし、大湯環状列石では、「大湯型」と呼ばれる配石遺構の集合体が円状に配置されているため、どの地域も配置方法に関しては同じであるとはいえない。環状列石は円の二重、三重構造のあり方は同一といえるが、その配置方法は地域によって異なっているといえる。これらの配石からは、集落の構造や墓制との関係を有することや、非日常的な祭

祀が行われていたことが確認できる（阿部 1983：33 頁）。配石の平面構造から縄文人の社会や宗教体系を知る糸口となるのである。

これらのことから、①立地、②築造時期、③構造の3つの共通条件が環状列石のあり方であり、特徴であるといえる。

では、その環状列石はどのような目的で造られたのであろうか。環状列石は、出土遺物や遺構状況を根拠として墓説や祭祀施設説、天体観測施設説など様々な説が唱えられている。しかし、これらの説はどの環状列石においても一つに絞ることはできない。そこで考えられるのは、環状列石は一つの用途に固執した施設ではなく、ある種の複合施設のような役割をはたしていたのではないだろうか。大湯環状列石を例に挙げると、環状の周辺には住居帯が存在し、環状帯と住居帯の分割によって集落が構成され、それに対して石柱や石棒・土偶が確認されたこと、特に石柱は祖霊に関わるものとして配石の中央などに置かれる場合があるため居住空間とは反対に神聖な場であったと認識できる（阿部 1983：41 頁）。ある時は、墓であり、ある時は祭祀施設、そしてある時は天体観測施設や居住空間など、用途に合わせ形を加えて造られたもの、つまり、総合的な役割を持った施設ではないかと考える。

おわりに

今回、伊勢堂岱遺跡、大湯環状列石、小牧野遺跡の3つの環状列石を中心に研究を行い、比較、検討した結果、立地、時期、構造の3つの共通条件が環状列石の特徴かつあり方であるといえる。環状列石の目的においては、墓や祭祀場、天体観測施設などの用途を合わせて造られた総合的な施設であると考えられる。

また、環状列石とは異なった形の遺跡や国外のストーンサークルのあり方を比較し、共通点と相違点を検討することでその地域の特色や性格がうかがわれた。今回は北東北の3つの環状列石に範囲をしばり検討を行ったが、伊勢堂岱遺跡や大湯環状列石、小牧野遺跡の他にも北東北には数多くの縄文時代の遺跡や環状列石が存在している。環状列石の3つの条件とその目的に関する解釈はあくまでも、調査した3つの遺跡を比較した結果のみであって、それがすべての環状列石に当てはまるとは言い切れない。今後の課題として、北東北の遺跡はもちろん、環状列石に関連する国内外の遺跡にも範囲を広げて分析をすることが必要である。

参考文献

- 青森市教育委員会編 1996『青森市埋蔵文化財調査報告書第30集 小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会
- 青森市教育委員会編 2005『青森市埋蔵文化財調査報告書第78集 三内丸山(8)遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会
- 秋田県埋蔵文化センター編 1999『秋田県文化財調査報告書第293集 伊勢堂岱遺跡—県道木戸石鷹巣線建設事業に係る 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—』秋田県教育委員会
- 秋元信夫 2005『シリーズ「遺跡を学ぶ」017 石にこめた縄文人の祈り・大湯環状列石』株式会社新泉社
- 阿部義平 1983「配石」『縄文文化の研究 第9巻 縄文人の精神文化』雄山閣出版株式会社
- 岡田康博 2000『遙かなる縄文の声 三内丸山を掘る』日本放送出版協会
- 鹿角市教育委員会編 2009『鹿角市文化財調査資料96 特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(25)』鹿角市教育委員会
- 小林達雄 2002『縄文ランドスケープ』NPO法人ジョーモネクスジャパン機構
- 成田滋彦 1994「青森県の土器」『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器Ⅱ』雄山閣出版株式会社
- 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 2012『縄文のストーンサークル』八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
- フレッド＝ホイル 桃山まや訳 1983『ストーンヘンジ 天文学と考古学』株式会社みすず書房
- 山田英春 2006『巨石 イギリス・アイルランドの古代を歩く』株式会社早川書房
- ロビン＝ヒース 荒井喬訳 2009『ストーンヘンジ 巨石文明の謎を解く』株式会社創元社